


平成20年度企画展

屏風に描かれた ふるさと三島

平成21年

3月15日 ▶ 5月24日



三島市指定文化財である三島宿風俗絵屏風は、江戸時代の三島宿の様子を語る上では欠くことのできない貴重な資料です。横6メートルに及ぶ六曲一双の大画面に川原ヶ谷を中心とした箱根街道、宿内の三嶋大社、問屋場、本陣、旅籠、店の様子やそれぞれに関わる人々など、往時の三島の人々の生活の諸相が生きいきと描きだされています。この企画展では、三島宿風俗絵屏風にスポットをあて、屏風に描かれた景物について絵図や文書などの資料を通して紹介し、江戸時代の三島宿の様子を概観しようとするものです。

三島市指定文化財「三島宿風俗絵屏風」 六曲一双 紙本着色 小沼満英筆 三島信用金庫蔵

通常の屏風よりひとまわり小さい中型の屏風（六曲一双）で、画面全体に江戸時代の三島宿を中心とした風景が描かれています。今から約170年前の天保年間（1830 - 43）に三島宿の旧家山口家（本町）に半年のあいだ逗留した絵師小沼満英が、宿代としてこの屏風を描き残したと伝えられています。残念ながら作者である満英については、屏風に記された落款・印章がわかるのみで絵師としての画歴や人物については不明です。

当時の描写手法にしたがい、宿場とその周辺の景観を俯瞰的に捉え、省略と強調の手法を取り入れながら東西の距離を大幅に縮小し、建築物も主な建物に限定した画面構成となっています。樹木や人物の表現描写は簡略ですが、四季の景観を盛り込みながら、全体的な宿場の賑わいや湧水に恵まれた三島の生きいきとした風景を描き出すことに作者の主眼が置かれているようです。確かに屏風の前に立って眺めると、そこには約170年前の三島宿の往来や庶民生活の賑わいと湧水の流れる音が聞こえてくるようです。描かれている人物は、往還を行き交う旅人や宿内で生活する庶民で、総勢164人（右隻66人・左隻98人）が描き込まれています。

右隻（向かって右側の屏風）は秋と冬の季節で積雪の富士と箱根西麓を遠望として、川原ヶ谷や新町橋にかけての東海道筋と

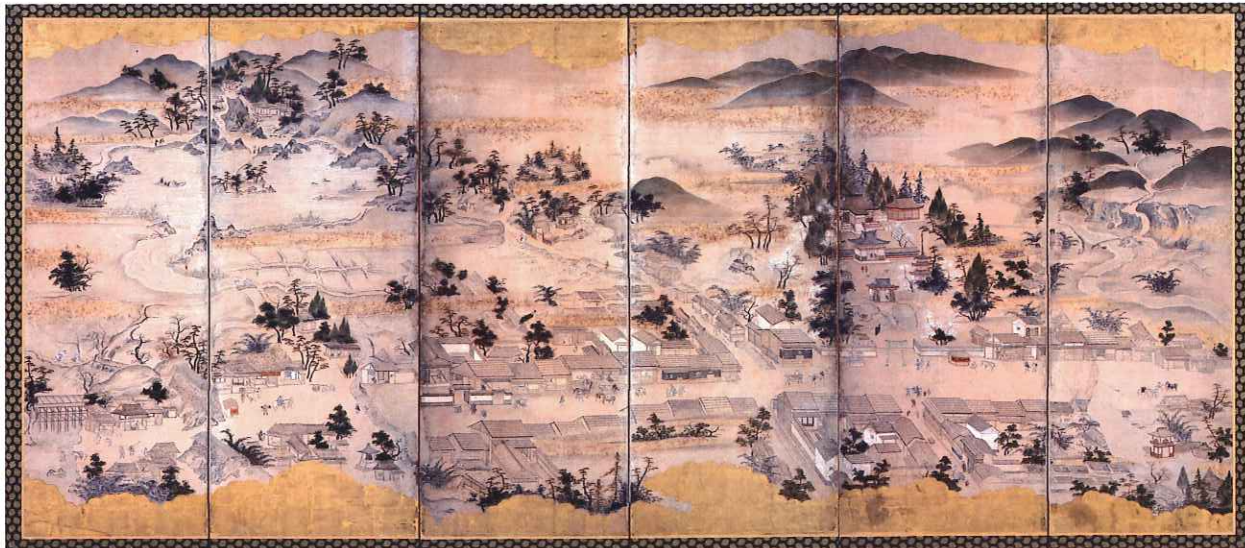
農村風景が描かれています。今井坂付近では往来する旅人と共に物乞いや賭博する者などが描かれていて興味深いものがあります。紅葉真っ盛りの愛宕茶屋周辺では紅葉を愛でながら酒宴を楽しむ人々が描かれ、川原ヶ谷では雁が飛ぶ中、稲刈り、脱穀作業、牛を使った耕作、馬で稲を運ぶ様子など農村風景が繰り広げられています。

左隻（向かって左側の屏風）は、三嶋明神（三嶋大社）から千貫樋の架かる境川までの賑やかな宿内の様子を春と夏の季節感を漂わせながら描かれています。桜花爛漫の三嶋大社では社殿・護摩堂・三重塔・仁王像が安置された総門が描かれ、安政元年（1854）の大地震の倒壊前の様子を見ることができます。宿の中心街に位置する問屋場では馬の継立の最中で、忙しく従事する人々の慌たじさが伝わってきます。街道では大社前に地方周りの神楽の一行、供を従えた侍、馬の手綱をさばく馬子、天秤棒で荷を担ぐ者、駕籠かきなどの姿が見られ、店では饅頭売り、魚や干物、わらじなどを売る店が軒を並べ、賑わう宿内の喧騒が聞こえてくるようです。また、郊外の小浜池では船遊びを楽しむ人々や池周りを散策する人など長閑な風景と共に、豊かな湧水に恵まれた地で洗濯をする女性の姿もみえ、生きいきとした庶民の生活を垣間見ることができます。

右隻



左隻



小沼満英筆
天保



左 当時の牧士の姿
世古主人と思われる人物



世古本陣において愛鷹牧の掛り長と牧士とが対面後、隊列を組んで愛鷹牧に向かう行列の様子と愛鷹牧の風景が描かれている屏風です。江戸時代、愛鷹山麓は幕府御用馬の放牧場でした。毎年1回、概ね9月から11月の農閑期に牧の最大行事である馬の捕獲が行われました。

牧士とは江戸時代、幕府の役人の配下として、幕府直轄の牧場の維持管理を担った一つの役職で、愛鷹牧では文政期から12名となり、選ばれたのは宿村の間屋・年寄・本陣・名主などをつとめた在地の有力者でした。三島宿の世古本陣の当主六太夫清道（1815～91）は、文久2年（1862）に親類である大諏訪村の広瀬清三郎が退役した代わりとして愛鷹牧の牧士に就任しています。牧士には四両二人扶持、牧士見習は二両二分の給金が与えられました。野馬方（野馬を牧場より追い出して城に送る役で普段は野馬の飼育を掌りました）の役人が世古本陣を定宿として利用していたこともあって、本陣当主の牧士就任につながったといわれています。清道の養子である直道（1838～1915）は元治元年（1864）に牧士見習になりましたが明治維新に際し退役しています。清道はその後、明治元年の徳川家の駿河移封に際し、駿東郡木瀬川村に移住、静岡藩より牧士取締に任命されています。

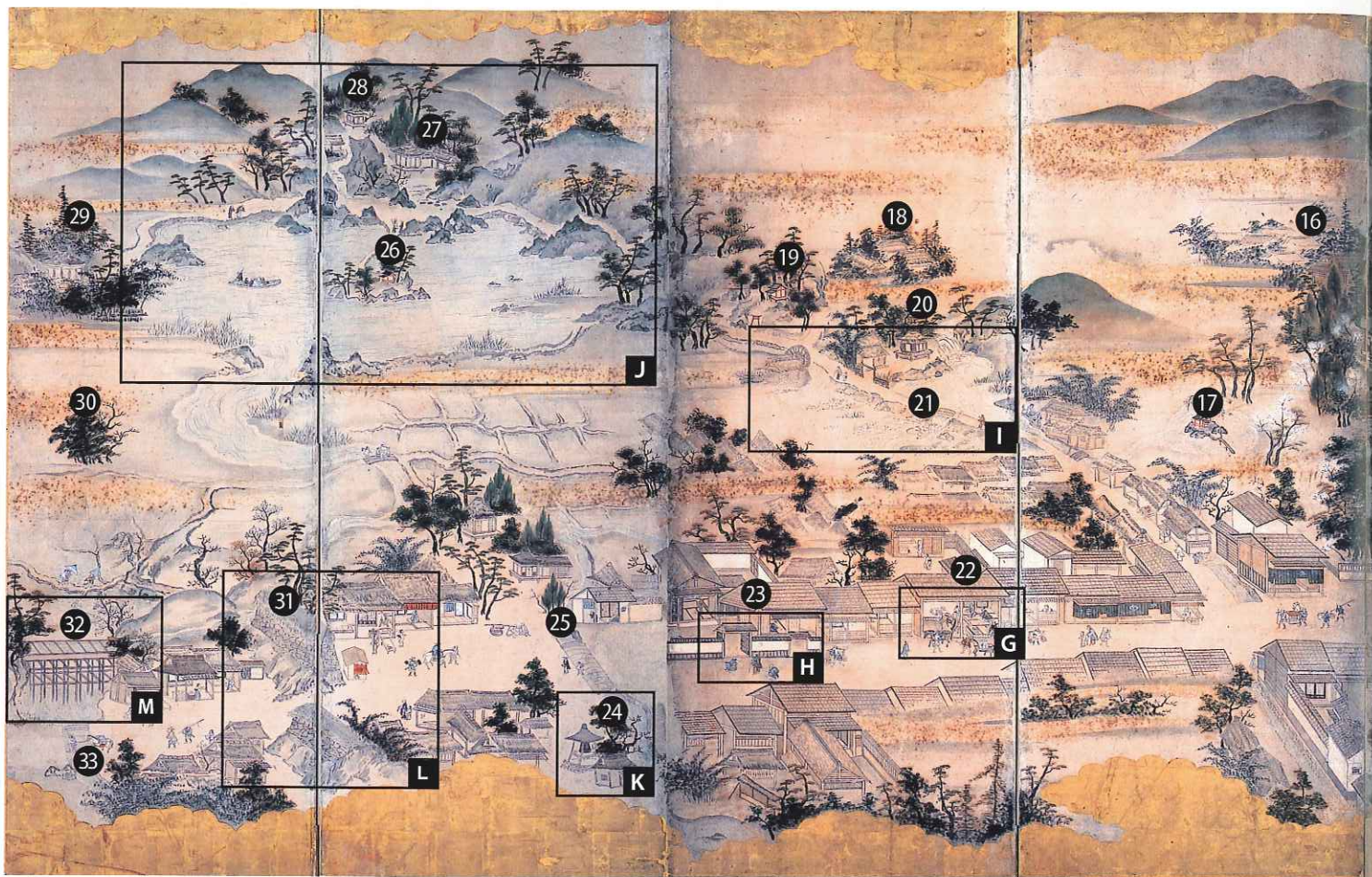
本屏風は4つの場面で構成され、上段には愛鷹の放牧場の風景が描かれ、山麓に放牧されている野馬や、陣幕の傍に集まる

勢子役に駆り出された人々や見物人が描き込まれています。中段には「塩谷豊後守宿」と書かれた関札と塩谷豊後守の家紋左三巴の幕が掛かる本陣前を、黒駕籠に乗って出立する豊後守の行列が描かれています。門前に立つ袴を着た人物が世古本陣の主人と思われます。下段には本陣内の広間で小姓をひかえて上座に座す掛り長（塩谷豊後守）と牧士12名・見習3名との対面の様子が描かれています。また、その右側には二人の供を従えた馬乗の牧士の風俗が説明的に描き加えられています。「明治二年十一月改革 駿州愛鷹牧捕馬之図」と題された本図と同様な絵が別に伝存していることから、本屏風も同時期に描かれたものと思われます。

（上段）「文久二壬戌年御捕馬御用塩谷豊後守殿駿州愛鷹御牧場出張之図」
 （中段）「掛り長三島本陣ヨリ牧場臨場之図」
 （下段）「三島本陣世古六太夫宅ニ於テ愛鷹牧士十二人同見習三人掛り長対面之図」左
 「当時牧士之風俗」右

御給金四両 被下 世古六太夫
 式人扶持 愛鷹牧士江
 其方儀此度牧士江伺候
 平岡丹波守度御當取を以
 伺之通可申渡旨被仰渡候
 依之申渡候
 戌十一月

屏風上部左端に貼られた辞令の写し



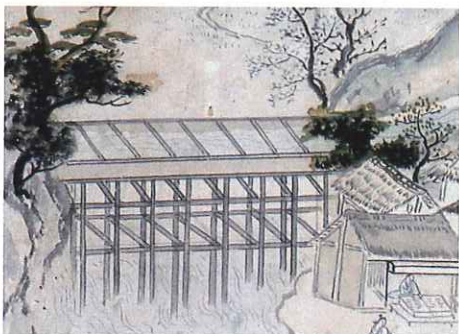
L 火除土手

火事による延焼を防ぐための土手で、当初は時の鐘あたりの街道を挟んだ両側にありましたが、正徳年間の朝鮮通信使の来日を機に道路整備のため、千貫樋の近くに移されました。



J 小浜池

中央に広瀬神社がある小浜池周辺では、散策する人や船を浮かべて酒宴に興ずる様子が描かれています。溶岩の岩間から富士の雪解け水が豊かに湧き出て、勢いよく流れている様子がわかります。この湧水は源兵衛川、四の宮川、千貫樋へつながる小浜用水へと流れ、灌漑用や生活用水として利用されました。



M 千貫樋

小浜池の水を駿河の五ヶ村(玉川・伏見・八幡・長沢・柿田)の田地に灌漑するために架した木樋。



K 時の鐘

広小路にある四本柱の鐘つき堂で、旅人や宿内の人々に親しまれてきました。

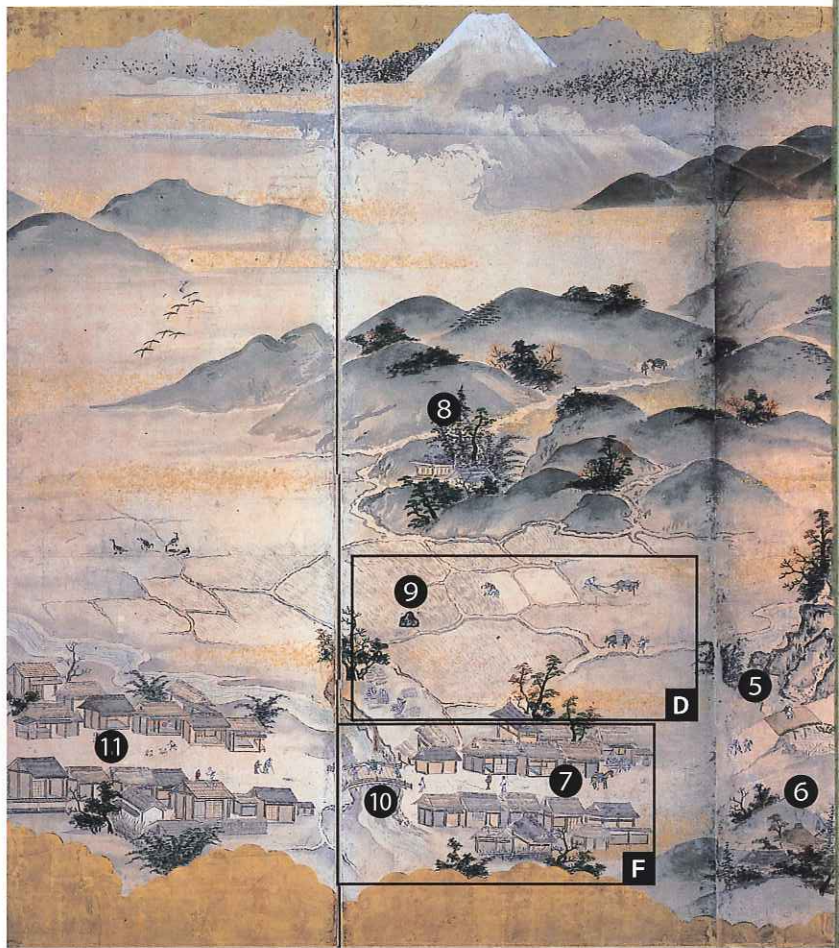


I 白滝観音付近

白滝観音近くの川の流水量が多かったことがわかります。川の流水量を利用して粉摺や精米するための水車小屋(搗屋)が建てられています。右下の人物の前には水門(通称ドンドン)があります。



左隻は、三嶋大社から賑やかな街道筋の問屋場・本陣などが集まる中心街の風景と郊外の小浜池を中心とした長閑な風景が描かれています。桜花爛漫の三嶋大社や小浜池の船遊びの風景など、春から夏にかけての四季が盛り込まれています。



D E 田起し、牛による耕し、稲刈り、脱穀など三島の農作業の様子が描かれています。田の中にある大きな石は春米塚です。『増訂豆州志稿』によれば、春米塚は武州の増尾春米が処刑されそうになった場所に塚を築いたと伝えられていることが記されています。



H 世古本陣
白い塀をめぐる立派な門構えの本陣が描かれています。門前では、ちょうど到着した侍を本陣の者が土下座して迎えています。



G 問屋場
問屋場は、人馬の継立、御用旅宿の手配など宿駅の中核業務、また商品物資運送の取り扱いを行ったところで、宿役人、馬差・人足差が詰め、伝馬として二百人百疋の人馬を抱えていました。



F 新町橋と川原ヶ谷
新町橋は、川原ヶ谷と三島宿東端の新町との間を流れる大場川(別称賀茂川、神川)に架かる橋で、この橋を渡れば三島宿に入ります。この屏風では省略されていますが、橋の西側には石積みみの升形と東の見付木戸が設けられていました。



- ① 愛宕社
- ② 今井坂
- ③ 愛宕茶屋
- ④ 真立寺
- ⑤ 川原ヶ谷橋
- ⑥ 宝鏡院
- ⑦ 川原ヶ谷
- ⑧ 願成寺
- ⑨ 春栄塚
- ⑩ 新町橋
- ⑪ 新町
- ⑫ 妙行寺
- ⑬ こくぼ
- ⑭ 護摩堂
- ⑮ 三嶋明神
- ⑯ 社家村
- ⑰ 浦島社
- ⑱ 愛染院
- ⑲ 浅間社
- ⑳ 白滝観音
- ㉑ 水門（ドンドン）
- ㉒ 問屋場
- ㉓ 世古本陣
- ㉔ 時の鐘
- ㉕ 源兵衛橋
- ㉖ 広瀬社
- ㉗ 宝国院
- ㉘ 七面堂
- ㉙ 本覚寺
- ㉚ 八幡（若宮）
- ㉛ 火除土手
- ㉜ 千貫樋
- ㉝ 境川橋



B 博打打ちと物もらい
 筵を敷いて四人の博打打ちが博打に興じている様子を一人の荷担ぎが荷を下ろして見えています。少し離れた左側には柄杓を手にした物もらいがいます。



C 真立寺付近
 真立寺では小僧を従えた僧侶、その下には団子を売る店、駕籠を置いて露天の物を買求める駕籠かき、縁台で一休みする旅人、右手には二人の比丘尼が、やってきた侍に話しかけようとしている様子が描かれています。

右隻は、秋から冬にかけての四季を盛り込みながら積雪の富士と箱根西麓を遠望として、川原ヶ谷、新町橋にかけての東海道筋や農村風景が描かれています。今井坂に続く坂の上には愛宕社、その下には北斎や広重も休憩したと伝えられる愛宕茶屋での紅葉真っ盛りの風景とともに、稲刈りや牛を使った耕作、稲の脱穀などの農作業の風景もみることができます。



A 愛宕茶屋と今井坂
 紅葉真っ盛りの愛宕神社の下にある愛宕茶屋では、床に掛軸をかけた座敷の中での接客の様子、庭では紅葉を愛でながら一献傾けている男性たちの姿が描かれています。また、今井坂では駕籠に乗った旅人や飛脚などの姿も見られます。

三島宿

三島宿は江戸日本橋より数えて11番目の宿場で、東海道五十三次の中でも賑わいをみせた宿場の一つです。近世の三島宿は慶長6年(1601)正月に宿駅として伝馬人足各36を常備するよう命じられたのが始まりです。宿域は、当初新町橋から大中島(現在の本町)まででしたが、1711年(正徳元年)に西見付であった広小路火除土手が境川東岸に運ばれ新しい見付となり、西へと広がり発展していきました。

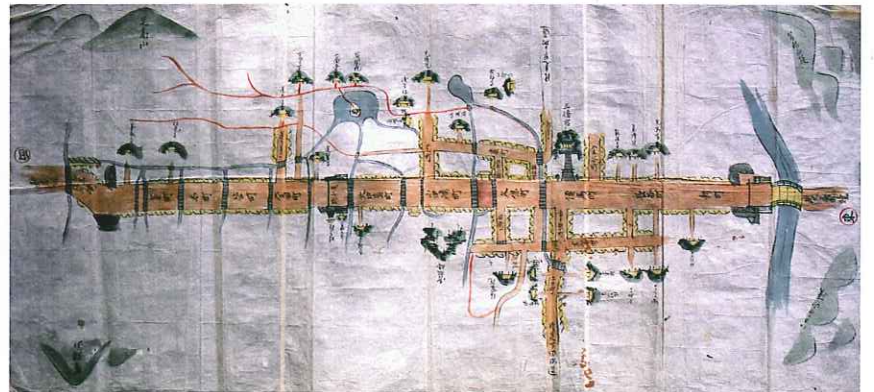
東の新町橋から西の千貫樋まで18町余(約2キロメートル)、この間の道幅が4間余(約8メートル)、石高が2,632石余で、石高から見ると東海道では3番目の大きな宿場でした。西からきた旅人たちは箱根の山越に1日かかるため、三島には旅人が泊まる宿泊施設が多くありました。『東海道宿村大概帳』(1843年・天保14)によれば、宿内の施設は問屋場1軒(現在の市役所中央町別館)、大名・公家・役人などが宿泊する本陣2軒、脇本陣3軒、一般の旅人が宿泊する旅籠が74軒で、総家数1,025軒、人口4,048人でした。また、南への下田街道、北への佐野街道(甲州道)が分かれる交通の分岐でもあり、江戸時代初期には伊豆を管理する代官所が置かれ、のちに三島陣屋となりますが、伊豆支配の要でした。宿の北には富士山からの湧水が小浜池など何ヶ所も湧き出て、いく筋もの流れとなり街道を横切っていました。古くから水の都として三島宿は知られていたのです。



東海道分間絵図(部分) 郷土資料館蔵



五街道中細見記 関守敏氏蔵



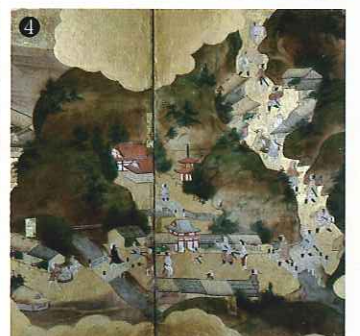
三島宿街道絵図 郷土資料館蔵

道中図屏風に描かれた三島宿

参勤交代の大名行列や伊勢参りの庶民などの多くの旅人で賑わいをみせるようになると、東海道への関心も高まり、元禄3年(1690)に絵師菱川師宣による『東海道分間絵図』が刊行され、旅の参考となる街道図の需要が増えていきました。こうした動きの中で、絵図や実測図を元にして街道を主題とした絵巻物や屏風も町絵師たちによって描かれるようになりました。

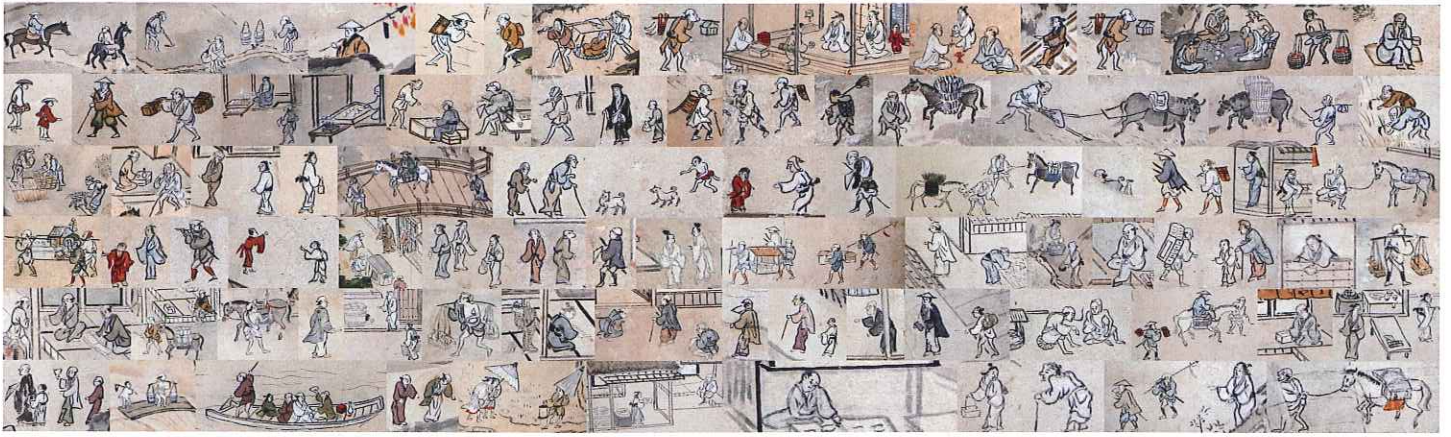
現存している道中図屏風の多くは画面の制約上、全宿場と周辺の景観を描き込むため、街道や宿場の位置の正確さよりも、むしろ各宿場や周辺の景観の特徴や旅人の風俗をとらえ、見て楽しむことができる観賞用として描かれています。

三島宿の場面では三嶋明神(三嶋大社)が象徴的に描かれ、宿内の家並みに加え千貫樋や東西の川と橋が描き込まれています。「大日本五道中図屏風」は幕府が慶安4年(1648)に制作した東海道実測図を元図にしたと考えられ、江戸前期の街道の様子を知ることができるもので、三島宿の場面には御殿が描かれています(図①)。



- ① 大日本五道中図屏風(部分) 三井記念美術館蔵
- ② 東海道中図屏風(部分) 大津市歴史博物館蔵
- ③ 鳥指定文化財 東海道図屏風(部分) 静岡市教育委員会蔵
- ④ 東海道図屏風(部分) 豊橋市美術博物館蔵

屏風に描かれた人びと 総勢約 164 人



売薬の行商人のようです。背中にしょっているのは薬箱。江戸時代では自家製剤の薬を持って全国の町や村々に行商に出かけました。読み書きや算盤ができ、薬や医学の知識があるので、得意先での信頼が厚かったといわれています。



六十六部と呼ばれる人物でしょうか。六十六部は全国六十六ヶ所の霊場に法華経を一部ずつ納めて歩く廻国の聖で、お経や仏像などを入れた笈を背負い、鈴・鉦を鳴らして物乞いをして廻る者が多かったといわれています。

だれ? なに者?

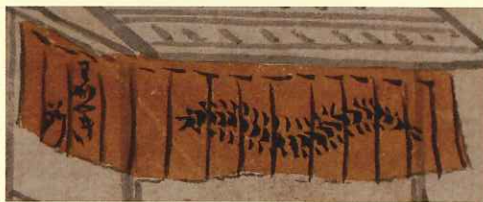


寺社の縁起や霊験談に節をつけて唄いながら遊行した尼僧で、歌比丘尼・絵解き比丘尼とも呼ばれ、技芸や歌謡を演じて人々の関心を集め諸国を廻り歩きました。常に小脇に箱を携えているのが特徴で、箱の中に極楽・地獄絵、熊野牛王宝印の札を入れていました。



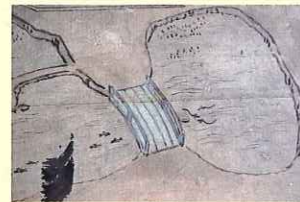
斜めに突き刺さるような雨が降るなかを一つの傘をさして歩く二人の女と一人の男。「三島女郎衆」でしょうか、紅い蹴出し(下着)をみせながら風上に向かって歩く二人の足許を男が提灯で照らし先導しています。

なんだあ? わかやき所?



三嶋大社の鳥居の右側にポツンとある出店。軒先に打ち回した朱色の暖簾には誰もが目を惹きそうな奇妙な絵。暖簾の左側には「わかやき所」と読めそうな文字が見えます。「わか焼き所」「若やぎ所」など、いろんな解釈ができそうですね。いったい何のお店でしょう!?

ウナギ発見!



三嶋大社の鳥居をくぐったところにある心字池(神池)、よく見ると橋の付近に鯉とともにウナギが遊んでいます。ウナギは三嶋明神の使いとされ、氏子は食べなかったそうで、そのため江戸時代では三島を流れる清流にもウナギが多かったといわれています。

協力者(敬称略・50音順) 大津市歴史博物館 佐野美術館 静岡市教育委員会 関守敏 世古直史
豊橋市美術博物館 沼津市明治史料館 三島信用金庫 三井記念美術館



再生紙を使用しています

平成 20 年度企画展

屏風に描かれたふるさと三島

会 期 平成 21 年 3 月 15 日～5 月 24 日
会 場 三島市郷土資料館
主 催 三島市教育委員会 三島市郷土資料館
発 行 日 平成 21 年 3 月 15 日

編集・発行 三島市郷土資料館
静岡県三島市一番町 19-3 楽寿園内
TEL. 055-971-8228 FAX. 055-981-3730
HP <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>
印 刷 文光堂印刷株式会社